



昨年度の日本人の平均寿命は、男性79・19歳、女性85・99歳。いずれも過去最高を記録し、世界有数の長寿国をあらためて内外にアピールすることになった。

高齢化社会を背景に、医学が日進月歩を続ける中、人生の最後をどう迎えるかに関心が高まるようになってきた。治る見込みがない、あるいは、もうすぐそこに死が迫っているとしたら……。むろん、たとえ治療に苦痛がともなっても、一縷の望みをかけ、医師の延命治療に身を委ねる人も多いだろう。

「無意味な延命措置をせずに、安らかに、自然な死を迎えたい」

という考えのもと、尊厳ある死を訴え続けてきたのが、日本尊厳死協会の副理事長を務める松根敦子さん(76)だ。

「暑い中を、お疲れさまですねえ」

東京・本郷にある同協会の関東甲信越支部で記者を出迎えてくれた松根さんは、身長148センチと小柄ながら、ピンと背筋の伸びた、よく声の通る女性だった。

日本尊厳死協会は、1976年、産婦人科医で国会議員でもあった太田典礼氏を中心

死は、誰にも必ず訪れます 自分のために、家族のために 人まかせには したくないんです

……人生の終幕を、どのようにまっとうしたいか――。

誰もが考えるべき問題だろう。

末期の病にかかったとき、無意味な延命治療を望まない

「尊厳死」という選択肢。

松根さんは、その必要性を30年以上にわたって訴え続ける。

「死について考えることは、命の尊さについて考えること」という松根さんの言葉は、重い。

自分らしく生きたから

自分らしい最期を――

松根敦子さん

日本尊厳死協会・副理事長

となり、医師や弁護士などで発足された団体だ。現在、同協会の登録者数は11万2000人。男女比では約3対7と女性が圧倒的に多いが、「これは、女性には新たな命を世に送り出し育てると同時に看取りを任せられるという側面があるからです。そのため、やはり男性より死を身近に考えざるをえないんですね。ただ、この数年は妻にすめられて……」と夫婦で登録される男性も多く、日本人男性の死に対する考え方も徐々にではありますが、変化してきているような気がしますね」と松根さんはいう。

同協会に入会するには、リビング・ウィルと呼ばれる「尊厳死の宣言書」に署名・捺印し登録をすませる。

リビング・ウィルとは、1967年にアメリカの「死の権利協会」が命名した造語で、それが60年代後期に入り、日本に上陸したのだという。現在、同協会が定めるリビング・ウィルの要旨は3つ。

(一)、私の病状が、現在の医学では不治の状態にあり、すでに死期が迫っていると診断された場合には、徒に死期を引き延ばすための延命措置は一切お断りいたします。
二、ただしこの場合、私の苦

痛を和らげる処置は最大限実施してください。そのため、たとえば麻薬などの副作用で死ぬ時期が早まったとしても、一向にかまいません。三、私が数ヶ月以上で、いわゆる植物状態で陥った時は、一切の生命維持装置を取りやめて下さい。

以上、三つの宣言にしたがつてくださった時、すべての責任はこの私自身にあります。協会では、これを保管、管理するほか、リビング・ウィルを提示したにもかかわらず、医師から拒否された際の説得に赴いたり、協会の弁護士が患者の意思を代弁することもあるという。

「最近、事前に医師に、尊厳死協会の会員だということを伝えておくことで、逆に告知がスムーズになることも多く、トラブルになるようなケースは少ないという。」

松根さんは1933年、東京・目黒区内の閑静な住宅街で生まれた。父の益治さんは旧制高校の英語教師で、「とにかく賑やかなことが大好きな人でしたからね。葬式には大勢の人を集めて麻雀大会をやっていた……なんていう話

イスはほとんどありません。むしろ問題になるのは、いつも世話をしてる身近な方が、ご本人の意思を理解していても、遠くに住んでいる親戚が顔から出てくるケースです。ですから、そうならなすために、まず登録する前にキチンとご家族と話し合いを持ち、意思の疎通をしておくこと。そして、登録したら、必ず「自分の意思はこうなんだよ」ということをオウブンしておくことです。延命治療を施された後、亡くな

が普通に食卓で出るような家庭で、そのため子どもたちから不思議と死について暗いイメージがなかったんです。高校を卒業後、21歳で日本テレビの編成局に勤める光雄さんと結婚。

「天は、縁あって日本テレビに入社したんですが、なにせテレビ黎明期ですよ。野球中継をするにもカメラが3台しかなかった時代で、もちろんVTRなんてありませんから、全部生放送。そのうえ下手も足りないから、野球中継のほかに駅伝、相撲と、あらゆるスポーツ中継を担当することになった（笑）。」

「死に方」を決めるように「死に方」も決めたい……

「生きているうちに、死に方」を決めたい……

「死に方」を決めるように「死に方」も決めたい……

「死に方」を決めるように「死に方」も決めたい……

「死に方」を決めるように「死に方」も決めたい……

「死に方」を決めるように「死に方」も決めたい……

「死に方」を決めるように「死に方」も決めたい……

「死に方」を決めるように「死に方」も決めたい……

「死に方」を決めるように「死に方」も決めたい……

「死に方」を決めるように「死に方」も決めたい……

「死に方」を決めるように「死に方」も決めたい……

「死に方」を決めるように「死に方」も決めたい……

「死に方」を決めるように「死に方」も決めたい……

52年に家族で撮影した写真。夫の光雄さんはテレビマン。目の回るような多忙な日々を送っていた



1年後、義母を看取った後、その疑問が松根さんの脳裏から消えることはなかった。そんなある日のこと。

ふと目にしたのが、渡辺淳一氏の小説「神々の夕暮」だった。

同書は、生と死の選択を委ねられる医師が、医師自身の闘から安楽死の意味を問うた、問題作だった。

「その中に、自分の最期の時のために、あらかじめ自分の望みを記しておく運動を行っている団体がイギリスにある、ということが書かれていたんです。私も以前から、人の命は他人が決めることではないかと思っていたので、なんだかすごくピンと来るものがあった……」

後日、新聞で調べると、な

んと日本でも同様の活動をしている団体があるという。それが、日本尊厳死協会（当時の名称は「日本安楽死協会」）だった。

松根さんは、さっそく協会から資料を取り寄せ、説明を聞くこと、家族と話し合っ

「両親も夫も、説明を聞いてすぐに納得してくれましたが、当時は会員さんも1000人くらい。私自身まだ40代だったこともあり、友人に話しても最初はそれこそ変人扱いでね笑。でも、登録を

した時に、もう家族に迷惑をかけずに済んだ、という思いが込み上げてきて、なんだかとても気分が楽になったことを覚えてます」

「死に方」を決めるように「死に方」も決めたい……

「死に方」を決めるように「死に方」も決めたい……

「死に方」を決めるように「死に方」も決めたい……

「死に方」を決めるように「死に方」も決めたい……

「死に方」を決めるように「死に方」も決めたい……

「死に方」を決めるように「死に方」も決めたい……

「死に方」を決めるように「死に方」も決めたい……

「死に方」を決めるように「死に方」も決めたい……

「死に方」を決めるように「死に方」も決めたい……

「死に方」を決めるように「死に方」も決めたい……

「死に方」を決めるように「死に方」も決めたい……

「死に方」を決めるように「死に方」も決めたい……

人海にまぎれ

人海にまぎれ



日本尊厳死協会「死に方」をめぐって（松根さん）

新しいインプラント(人工歯根)治療 もう入れ歯とは さようなら



年間1000本の実績!!

本誌は歯をかぶせるまで最短でも3ヶ月程度かかりますが、わずか1日で歯を入れることができる画期的な方法です。歯をいれたその日に、インプラント治療と同時に歯が入られるため、治療期間中に歯がないという事はありません。頻りに通えない遠方の方でも安心して治療できます。この他、状態に合わせて豊富なインプラント治療がご用意されています。

一口元のたるみを改善

奇麗なだけでなく健康的な歯、機能的(かみ合せ)な歯を手に入れたらいい方は審美歯科での治療をどうぞ。美しい笑顔と自信を手に入れたらいいという効果もあります。

インプラント ¥367,500
その他、どなたの無償見学の良し入れ歯もご用意。スマイルデンチャー ¥157,500

東京都在住 女性 55歳 写真はインプラント治療の前です (公的保険は適用されません)

【お問い合わせ先】 美容外科・歯科・美容皮膚科

http://www.biyou-net.com

0120-891-929

24時間メール受付

faq@biyou-info.com

●メール受信拒否設定をされている方へ●

●biyou-info.comをドメイン登録してください●

QRコードで簡単アクセス!!

QRコードで簡単アクセス!!

QRコードで簡単アクセス!!

QRコードで簡単アクセス!!

QRコードで簡単アクセス!!

QRコードで簡単アクセス!!

QRコードで簡単アクセス!!

QRコードで簡単アクセス!!

QRコードで簡単アクセス!!

な思ひはさせたくないって。

そして、雑誌で調べてリビング・ウィルに登録したんです。以来、A子さんは、リビング・ウィルをお守り代わりに肌身離さず持ち歩いているという。

また、リビング・ウィルに登録したことで、

「本当に安らかな最期を迎えることができました」

と語るのは、松根さんの高校時代からの友人で、今年3月に夫をガンのために亡くした波多野ミキさん(74・日本尊厳死協会副理事長)だ。

波多野さんの夫・里望さんが、のどの異変を訴えたのは3年前のこと。

「最初は風邪だろう、と思って耳鼻咽喉科に通っていたんですが、1か月たってもよくならないで、大学病院で検査を受けると、すぐに舌ガンが見つかったんです」

そこで、すぐに専門病院を

訪れ、

「リビング・ウィルを医師に提示して、どんなことでも本人に告知してほしい」と伝えました。すると主治医もそれを理解してくれて、とても良好な関係の中でインフォームド・コンセントが行われたんです」

インフォームド・コンセントとは、医師が患者に病状や検査結果、今後の治療方法と見通しをわかりやすく十分に説明し、患者はそれを納得したうえで、示された治療方法を選択し、同意するということ。つまり「患者に十分な説明と同意を得た医療」のことだが、検査の結果、里望さんのガンは、切開で取り除けるものと判断され、2人はこれに同意。結果、16時間にも及ぶ手術が行われた。

ところが手術から1か月後「ようやく退院できる、となつたときに、また口と肺から

ガンが見つかってしまつて、このままの状態なら、余命は数か月だろうと……」

そこで、里望さんは、病床上で手紙を書いたため、家族に手紙を読まれたが、その後、ガンは肺にも転移し、ついに緩和病棟に移ることに。

でも、リビング・ウィルに登録していたことで、最期はともて充実した時間を過ごすことができました。辛い痛みがまったくなかったこともあって、病室では好きなお酒を飲みながら穏やかな日々を送ることができたと、最期となつた日も、夕方からワインとビールを飲んで、夕食も完食。その後の30分も休んで、いよいよ本当に静かに旅立っていったんです」

文字どおり、眠るような最期だったという。

松根さんがいう。

「数年前まで日本の医療現場では、医師对患者の間で、ま

かせておきなさい。おまかせします。といったような、暗黙の上下関係がありました。でも、人権の尊重という姿勢が社会全体に浸透してきたことで、ようやくここ数年で医療のあり方も変わってきました。いわば尊厳死は、医療行為の最後のひとつとも重要な

夫を看取って

自分の「死」を考える

いまでも驚かれやうわね」といつて微笑む松根さん。リビングのテーブルの上に置かれた木箱には、遺書などもキチンと取められているという。

松根さんと光雄さんが知り合ったのは、彼女が中学2年生の時。

「たまたま、友人のお兄さんが主人と同じ高校の野球部だったのね。で、ある日試合に誘われて、主人がマウ

分、の意思ではなく、人に任せ

るなんて、おかしい話じゃないですか。だからこそ、私は死が迫っていると判断された場合は、自然な形で死を受け入れた。ただ、そのために痛みだけは取り除いてほしいんです。そのうえで大切な人たちが最期の時間を過ごすことができないじゃないですか。何度でもいいやないですか。自分の命は人に任せると決めるべきものなんですから、」

そんな松根さんが今、一番に願うことが「命の日」の設立だ。

「死について考える、ということとは言い換えれば、生きる」ということを考えることです。命の尊厳を知られば、自ら命を絶ったり、人を傷つけることがいかに愚かな行為なのかかわかるはず。毎月とはいきませんが、少なくとも1年に1度、みんなで命の大切さを考え、そして家族で話し合う日にしてほしい。それが私の一番の願いです」

誰にとっても、必ず訪れる最後の関門である「死」。そんな最期のひと時をどう迎えたいのか。私たちがとりくむとが、「自分の納得のいく死に方」を考えるべき時期に来ているのだらう。

取材・文/山川敬司

撮影/御前原一郎

取材・文/山川敬司

撮影/御前原一郎

取材・文/山川敬司

撮影/御前原一郎

取材・文/山川敬司

撮影/御前原一郎

取材・文/山川敬司

撮影/御前原一郎



玄関を入ってすぐのところに、松根さんの「意思表明」が貼られていた。写真:御前原一郎

「死について考える、ということとは言い換えれば、生きる」ということを考えることです。命の尊厳を知られば、自ら命を絶ったり、人を傷つけることがいかに愚かな行為なのかかわかるはず。毎月とはいきませんが、少なくとも1年に1度、みんなで命の大切さを考え、そして家族で話し合う日にしてほしい。それが私の一番の願いです」

「死について考える、ということとは言い換えれば、生きる」ということを考えることです。命の尊厳を知られば、自ら命を絶ったり、人を傷つけることがいかに愚かな行為なのかかわかるはず。毎月とはいきませんが、少なくとも1年に1度、みんなで命の大切さを考え、そして家族で話し合う日にしてほしい。それが私の一番の願いです」



取材・文/山川敬司
撮影/御前原一郎

取材・文/山川敬司
撮影/御前原一郎

取材・文/山川敬司
撮影/御前原一郎

取材・文/山川敬司
撮影/御前原一郎

取材・文/山川敬司
撮影/御前原一郎

取材・文/山川敬司
撮影/御前原一郎